近江国における郡別大工組の存続と分立について

A STUDY OF THE COUNTY CARPENTER PARTIES IN EAST OMI-COUNTRY

吉田 高子*
Takako YOSHIDA

This paper is a part of my study on the carpenter parties Omi-Country during the Edo era.
In the east of the Omi-Country, there were five different carpenter parties : Kanzaki, Gamo, Yasu, Kurita and Koga county party.

These county parties were different on some points, such as the number of the carpenter in the party, the sphere of their influence in the county area, and how much they prospered.

Under these conditions, the management pattern of the parties was transformed into the three types : of-county party type (kanzakigun-party and Yasugun-party), county neighbourhood party type (Gamogun-Party) and in-county party type (Kuritagun-Party was divided into kuritakita-party and kuritaminami-party. Kogagun-party was divided into Bodaiji-party, Yamakita-party, Yamaminami-party, Kashiwagi-party and Soma-party).

Keywords : carpenter, Omi-Country, County-party, transformation

1. はじめに

中井役所支配六箇国大工組の内、河内国の大工組については先に報告した通り¹⁾で、河州六組は郡域を越えて広域に組域を持つ「広域大工組」の形態をとる3組と、最寄り数ヶ村の集合で狭域支配の「向寄大工組」3組が並存する状況であった。

広域大工組の存続には、河内国古橋組では世襲組頭家の存続と共に向寄による組内構成、向寄年行事による組内大工支配等が寄与したことを明らかにした。

近江国の大工組については、組数の上から見ても明和2年(1765)に26組(大津6組、在方20組)、安政2年(1855)には43組(大津6組、在方37組)と多数であり、河内国大工組とは組形態を異にしていたことが想像されこの内、東近江の甲賀郡組については1郡をもって仕事範囲とする「郡別大工組」の存在が知られている²⁾。この郡別大工組については、安政2年当時の六箇国大工組の中でも大工組名または大工組グループ名に郡名を冠しているのは、大和国宇陀組1組を除くと近江国以外には存在せず、近江国に特徴的に見られるものであることが考えられる。

そこで、近江国の大工組の形態について概観し、次に郡別大工組の存在が確認される東近江五郡(神崎・蒲生・野洲・栗太・甲賀郡)の大工組の構成形態、更にその存続と分立について³⁾、主に各組頭家所蔵の大工組関係文書⁴⁾により明らかにしようとするものである。

2. 近江国に於ける郡別大工組の地域分布

明和2年(推定)の『六ヶ国大工杣木引組頭名前并人数書⁵⁾』と安政2年『御造営御用役六箇国三職与頭名⁶⁾』によって、郡別大工組の近江国における所在状況をみることにする。表—1はこの史料によって明和2年と安政2年の近江国の大工組名と組頭居住地を示したものであり、図—1は安政2年の組頭居住地を地図上に取ったものであるが、通常この組頭居住地は組所在地と考えて良い。

この内大津六組は京や大阪の都市大工組と同様、大工職を専業とする町大工を構成員としているもので、いずれも大津に所在する町大工組で、ここに郡単位の大工組は存在しない。

在方大工組については琵琶湖西岸の西近江二郡、つまり高島郡と滋賀郡には郡別大工組は存在しなかった。この地域では寛永13年(1636)に既に大工頭の存在が確認できるが⁷⁾、西近江四組の大工組⁸⁾につながる4人の大工頭は、何れも高島郡内の安曇川が琵琶湖に流入する河口周辺地域に居住していた。西近江四組は、このあたりに向寄大工組を構成していたと言えるが、高島郡横江村居住の組頭中西佐右衛門は横江村周辺大工に加え、大津を除く滋賀郡全域の大工をも支配していたから、四組のうち横江組のみは広域大工組であった。

東近江五郡(琵琶湖東岸の神崎・蒲生・野洲・栗太・甲賀郡)では、寛永期には郡毎に大工頭が一人ずつ存在

* 近畿大学 講師・工博

Lecturer of Kinki Univ., Dr. Eng.

表一 近江国の大工組頭居住地と大工人数

安政2年(1855) 近江四十三組 家大工人数 2104人					明和2年(1765) 大津大工六組 113人 在方大工式拾組 1011人			
番号	組グループ名	大工組名	組頭居住地	大工人数*	大工組名	組頭居住地	大工人数(内引高持)	
大津	1	近江大津六組 (百石丁組) 船丁組 八丁組 小玉丁組 (石橋組) 松本組	大津百石町	210 人	百石町組	大津	20人	
	2		船丁		船町組	大津	19人	
	3		百石町		八町組	大津	17人	
	4		板屋丁		小玉町組	大津	19人	
	5		石橋町		石橋町組	大津	18人	
	6		小川町		松本組	大津	20人	
西近江	7	江州滋賀郡 高島郡	坂本組	351 人	(横江組)	同左	112 人	内78人 内23人 (持高有)
	8		横江組		(太田組)	同左	48 人	
	9		太田組		万木組	高島郡西万木村	52 人	(持高有)
	10		同 東万木村		(霜降組)	同左	47 人	
	11		滋賀組					
	12		滋賀郡北比良村					
	13		高島郡霜降村					
	14		高島郡坂本村					
東近江五郡	15	栗太郡組	南組	230 人	南組	同左	29 人	内25人 (持高有)
	16		北組		北組	栗太郡総村	72 人	
	17・18・19	蒲生郡組	蒲生郡竹村他	512 人	(蒲生郡組)	蒲生郡八幡	324 人	(持高有)
	20		組頭8 人				16 人	
	21	甲賀郡組	菩提寺南組	255 人	菩提寺組	甲賀郡		内11人 (持高有)
	22		柏木組		柏木組	甲賀郡市場村	87 人	
	23		山北組		山北組	甲賀郡滝村	30 人	
	24		山南組		山南組	野洲郡吉地	63 人	内25人大工 内5 人百姓 内17人
	25	野洲組	野洲組	122 人	(野洲組)	野洲郡佐生村	27 人	
	26	神崎郡組	神崎郡組	163 人	佐生組	神崎郡佐生村		
琵琶湖東北地域	27	愛智郡組	愛智郡下中野村					
	28	坂田郡組	柏原組	92人	柏原組	坂田郡柏原宿	17 人	(持高有)
	29		能登瀬組		能登瀬組	同 左	6 人	
	30		横山組		(同左)	同左(十六ヶ村)	12 人	
	31		十六ヶ村組		(上野組)	同 左	6 人	
	32		上野組		(高田組)	浅井郡高田村	10 人	
	33・34・35	浅井郡組 伊香郡組	上浅井組	218 人	(留田組)	浅井郡留田村	19 人	(持高有)
	36		中浅井組		(/)	伊香郡権寺村	25 人	
	37		下浅井組		(/)	伊香郡井口村	9 人	
	38		東浅井組					
	39		西浦組					
	40		(富田組)					
	41		大北組					

他に、42 (石山組 栗太郡) 43 (草津組 栗太郡)

番号は図-1に同じ

安政2年:「御造宮御役六箇国三職組頭名」による。但し()の組名は「新造内裏御造宮棟梁方雑記 全」で補足した。

* 大工人数は「安政度京都御所造営時の各大工組の構成人員」西和夫・渡辺勝彦による。

明和2年:「六ヶ国大工杣木挽組頭名前并人数書」による。但し()の組名は推定

しており⁹⁾、郡内居住大工はその大工頭の配下にあると言う郡別大工組を構成していた様子が窺える。更に安政2年においても表一に見るように、栗太郡組と甲賀郡組では組グループ名として郡組の名を残しており、蒲生郡組・神崎郡組・野洲組は郡単位の大工組を構成している。このように東近江五郡については、寛永期から安政2年に至る史料により、郡別大工組の存在を指摘することができる。

一方、琵琶湖東北の四郡(犬上郡を除く4郡で愛智・坂田・浅井・伊香郡)については安政2年には組グルー

プ名として郡組名を持つものの、組名としての郡組名をとっていない。これら四郡には彦根領村が多く存在したが、彦根領内居住大工は遅くとも寛永13年には、中井配下から除かれており、井伊家の支配を受けていた¹⁰⁾。そのため、各郡における中井家支配下大工は、彦根領村を除く地に限られ(これが後に郡内の各地に向寄大工組を構成することになったものと考えられる)中井支配の大工高も少ない¹¹⁾。これは江戸初期において、中井家の要請でこれら四郡が作事等に出動することの少なかったことを示している。

図一 安政2年の近江国における大工組頭居住地

この四郡の内、愛智郡には中井配下の大工高もなく、郡別大工組は存在しなかったとして良いが、坂田郡については寛永18年に組頭九右衛門の名が見られ、能登瀬村組頭九左衛門の存在が宝暦7年(1757)の坂田郡上野村の松井家文書により確かめられる。しかし、明和2年の組大工人数は6人と少なく、能登瀬組頭九左衛門の支配は能登瀬村を中心としたもので、同じ坂田郡に存在する柏原組、十六ヶ村組、上野村組と同様、向寄大工組の形態をとっていたと考えられる。

浅井郡には竹生島御宮大工の阿部権正の他に、富田村組頭西島但島が明和2年が見られる。また文化13年の『大工仲間定書』¹²⁾には、「郡中立会い相論之上相究め候上者」とあり郡内の5組の組頭と竹生島御宮大工の連

印があるが、それ以前の史料も欠いており、向寄大工組の集合として郡別大工組の呼称が用いられたものであり、郡域を組域とする郡別大工組ではなかったといえる。

伊香郡については寛永18年に組頭権平の名がみられ、明和2年にも2人、安政2年に1人の組頭がいるが、郡別大工組としての存在は史料上確かめられない。

以上のように郡別大工組は、近江国においても東近江五郡に限り存在した大工組の形態であったということができよう。

3. 郡別大工組の成立と存在形態

1) 東近江五郡大工組の成立

東近江において郡別に大工頭が記された最も早いものは、慶長16年(1611)亥12月の八幡大工所をめぐる相論に関する高木家文書で、これには各郡を代表するような形で蒲生郡作右エ門、神崎郡兵太夫、栗本郡三右エ門の名が見られる。この名は寛永13年(1635)11月『近江国大工石高之帳』に記された「近江国大工頭蒲生郡 作右エ門、栗本三右エ門、甲賀佐治右エ門、神崎兵左エ門」の4郡の大工頭名に繋がるものである。つまり東近江五郡には、組形成以前から有力な大工が大工頭として各郡に存在しており、京の中井家は江戸初期の御用作事等に彼ら大工頭を通じて多数の大工を召集していた¹³⁾。

また東近江五郡は、東海道・中仙道で江戸に通じ京に近いと言う交通上便利な地にあり、そのような御用作事等の場合¹⁴⁾に、大工頭を通じて郡内の大工を質・人数等の上で揃え易く¹⁵⁾中井家にとって東近江五郡大工は、都合の良い存在であり、都合のよい形態を持っていたといえる。

これは江戸初期の御用作事などの際に、中井家がその出身地である大和国平群郡の法隆寺村とその周辺地域の大工を集中的に召集したことが、ここに多くの向寄大工組を構成させた¹⁶⁾と同じで、東近江五郡の大工を各郡の大工頭を通じて召集したことが、東近江五郡に郡別大工組を形成させることに繋がったものと考えられる。

また、寛永18年(1641)の『和州平群之郡東林寺奉加帳』に

表—2 東近江の大工組関係文書

文書名	蒲生郡組 高木家文書	蒲生郡組 井上家文書	野洲郡組 西村家文書	野洲郡組 田中家文書	甲賀郡組 小山家文書
所蔵者 住所 旧住所	高木敏雄 甲賀郡水口町 (蒲生郡八幡町)	井上源一 近江八幡市 (蒲生郡八幡町)	西村義一 守山市川田町 (野洲郡川田村)	田中 弥 守山市木浜町 (野洲郡木浜村)	小山岩雄 甲賀郡甲南町 (甲賀郡深川村)
文書数	168 点	63 点	30点	67点	210 点
内訳	申 渡 8 点 願書一般 11 点 証文 19 点 普請願書 101 点 木割・木寄帳 21 点 その他 8 点	申 渡 4 点 人別帳 4 点 願書一般 6 点 普請願書 22 点 入用銀関係 25 点 その他 2 点	申 渡 1 点 大工役引高 3 点 普請願書 23 点 その他 3 点	申 渡 5 点 大工役引高 8 点 願書一般・証文 9 点 普請願書 39 点 絵 図 5 点 その他 1 点	定書 4 点 願書一般31点 触書請書20点 証文65点 申渡類 10点 普請願書19点 役引高・人別帳 9 点 入用銀関係 11 点 大工高赦免 9 点 積り書・木割帳 5 点 公儀作事 23点 その他 4点
文書の 年代	慶長15年(1610)～ 慶応4 年(1868) 259 年間	嘉永6 年(1853)～ 慶応3 年(1867) 15 年間	宝永6 年(1709)～ 慶応3 年(1867) 159 年間	宝永7 年(1710)～ 慶応3 年(1867) 158 年間	寛永12年(1635)～ 慶応4 年(1868) 234 年間

江州作右エ門 (蒲生郡) 同組三人
江州かもう長兵へ (蒲生郡) 同組二十六人
江州三右エ門 (栗太郡) 同組三十九人
江州やす藤左エ門 (野洲郡) 同組二十四人
江州兵左エ門 (神崎郡) 同組二十四人
江州佐次右エ門 (甲賀郡) 同組二十七人
() 内は推定

の記載が見られる。つまり、寛永 18 年には郡別に大工頭 (但し、蒲生郡では作右エ門と長兵衛 2 人) の下に大工組の成立していたことがわかる。

郡別大工組の組織に関しても、稿本高木家文書寛文 8 年 (1668)『蒲生郡大工人数書帳』の前書に「一、他郡江出入致間敷事」の一項が見られるところから、同年には五郡大工組に郡別の意識が確立していたことがわかる。

2) 東近江五郡大工組の存在状況

次に表—2 に示した組頭家所蔵文書等によって東近江五郡の郡別大工組の存在状況を見ることにする。表—3 に示したように東近江五郡においては享保 20 年 (1735) 頃まではこの郡別大工組の形態が五郡共に存続していた。それは元文 5 年 (1740) の小山家文書に

為取替証文之事

一、東近江五郡之儀者 先年より郡切ニ細工仕候事五郡之組頭并組中立会 互ニ急度申合其旨守来リ候處に此度不届キ之儀御座候ニ付 又々五郡之組頭立会相談之上 相改弥々古来之通可相守之旨 相对相済証文為取替申候 然ル上ハ以後他郡ニ入込細工仕候儀堅仕間舖候 向後此旨不相守他郡へ入込其郡之組頭へ不遂相对ヲ猥ニ細工仕候者在之候ハ、御上へ御断申急度曲事之御願可申上候 為後日取替証文仍而如件

元文五年庚申三月五日

栗太郡大工組頭	穴村	與惣右衛門	印
甲賀郡大工年寄惣代	泉村	太兵衛	印
野洲郡大工組頭	永原村	喜右衛門	印
蒲生郡大工組頭	八幡町	但馬	印
神崎郡大工組頭	伊庭村	太郎右衛門	印

とあるように、栗太・甲賀・野洲・蒲生・神崎の 5 郡では①古来の通り郡切に細工をすること②他郡に入って細

工をしないこと③他郡に入込む場合はその郡の組頭の許可を得ること、等を申合わせており、郡別大工組を保っていたことが判る。

3) 東近江五郡大工組の支配範囲

五郡大工組の支配範囲は、いずれも郡域を組の支配範囲とするものであるが、各郡の広さや地理的条件は大きく異なっていた。(図—2)

まず神崎郡 (現、神崎郡と八日市市北部) については愛智川に沿って、その南側に東西に細長く伸びた形となっているが、郡域は狭く村落は西部に集まっている。さらに神崎郡には先に述べたように井伊支配の彦根領の 54 ケ村が散在しており、神崎郡組の支配範囲はそれほど大きいものではなかった。

蒲生郡 (現、蒲生郡、近江八幡市、八日市市南部) は広い郡域を有し、郡内には中央を東西に流れる日野川の上流に日野町、琵琶湖側に八幡町という商業の栄えた二つの在郷町が存在していた。この広域を支配するために蒲生郡組内は、琵琶湖に近い八幡町を含む下向寄、日野川中流の鶴川周辺の中向寄、それに日野町を含む日野向寄の大きく三向寄に分けられていた¹⁷⁾。

野洲郡 (現、野洲郡、守山市) は野洲川下流の琵琶湖岸の狭くまとまった郡であり、野洲郡大工組の支配域も他組に比べ狭かったことがわかる。

栗太郡 (現、草津市、栗太郡、大津市東南部) は野洲郡の 3 倍に近い広さを有するが、東部は山間地帯であるため大工も琵琶湖沿岸の北西部に多く居住していたと考えられる。また栗太郡組大工は地理的には陸路、水路共に京に最も近い所に住んでいたことになる。

甲賀郡組の支配範囲である甲賀郡 (現、甲賀郡) は広大な郡域となっているが、東西に野洲川上流の横田川と東海道が通り、南部の山間部を除き郡組内の交通の便は良かったことがわかる。

4. 東近江五郡の郡別大工組の存続と分立

1) 五郡大工組の変遷と組人数

史・料名	神崎郡組	蒲生郡組	野洲郡組	栗太郡組	甲賀郡組
寛永13年 1636 「近江国中大工石高之帳」(稿本高木家文書)	近江国大工頭 補主部 兵左エ門	近江国大工頭 補主部 作右エ門	-	近江国大工頭栗本 三右エ門	近江国大工頭甲賀 佐治右エ門
寛永18年 1641 「東林寺奉加帳」(安田家文書)	兵左エ門(組)	長兵衛(新) 作右エ門(組)	藤左エ門(組)	三右エ門(組)	佐治右エ門(組)
寛文9年 1669 「戸恐御所訟」(稿本高木家文書)	神崎郡 兵右エ門	蒲生郡 長兵衛 作右エ門	野洲郡 藤左エ門	栗本郡 三右エ門	-
貞享3年 1689 「送書」(稿本高木家文書)	兵左エ門	八幡 作右エ門	野洲 藤左エ門	-	大工組頭 甲賀 佐治右エ門
「普請願書」(高木家文書№143) 「普請願書」(田中家文書№57) 「高調〜并節連書寫」(小山家文書№191)	↓ ↓	(元禄7年) 八幡大工組頭 作右エ門 (享保11年) 八幡組頭 作右エ門	(宝永7年) 1710 吉川村 藤左エ門 (享保13年) 1728 三上村 伊右エ門	(正徳2年) 1712 金勝庄井上村 同 千石前門 { 大工組頭小石前門 同 千石前門	(元禄13年) 甲賀郡大工組頭 佐治右エ門 (享保20年) 1735 池田村大工組頭 佐治右エ門
元文5年 1740 「為取替証文之事」(小山家文書№86)	大工組頭 伊庭村 太郎右エ門	大工組頭 八幡町 但馬	大工組頭 永原村 善右エ門	大工組頭 穴村 与惣右エ門	甲賀郡大工年寄惣代 泉村 大兵衛
寛延3年 1750 「戸恐御所訟」(小山家文書№43)	↓	↓	↓	(北組) (南組) (菅堤寺組)	(山北組) (山北組) (山北組)
明和2年 1765 「六ヶ国大工、杣、木挽組頭名前井人数書」 (奥香寺寄託井内家文書)	与頭 佐生村 太郎右エ門	与頭 八幡 高木兵衛	与頭 吉地 利右エ門	与頭 矢橋村 市右エ門	(柏木組) (山南組) (山南組) (山南組)
天明8年 天明7年 1788~7 「定」(小山家文書№85) 「戸恐奉願口上之覚」(〃)	(天明3年) 次郎兵衛 大工与頭	↓	組 矢嶋村 久兵衛	与頭 矢橋 市右エ門	(柏木組) (柏木組) (柏木組)
文化5年 1808 「為取替証文之事」(小山家文書№88)	大工組頭 伊庭村 治郎兵衛	大工組頭 八幡 高木作右エ門	大工組頭 木兵衛	大工組頭 長左エ門	(山北組) (山北組) (山北組)
「普請願書」(高木家文書)(西村家文書B-11) 表2 「御達書印押帳」(金堂井)「一札之事」 (有文書)(小山家文書№19)	(天保4年) 1833 神崎郡大工与頭 五郎	(天保3年) 1832 八幡町年寄 吉兵衛	(天保4年) 1833 井口村 五郎兵衛	大工組頭 森村 伝右エ門	(仙組) (仙組) (仙組)
弘化4年 1847 「普請願書」(高木家文書№53) 「為取替之事」(小山家文書№89)	↓	蒲生郡八幡番寄 取替 長七 平兵衛	野洲郡向寄 大工入數改取締役 永原村 善太郎	栗太郎北向寄 大工入數改取締役 鉾村 儀兵衛	仙組 仙組 仙組
安政2年 1855 「御達書印用役六箇国与頭名」(京大図書館蔵)	与頭 能登川村 市兵衛	与頭 八幡町 半兵衛 中屋町 米次郎 竹村 嘉兵衛	与頭 木浜村 八右エ門	栗太郎南向寄 大工入數改取締役 失橋 市右エ門	仙組 仙組 仙組

※ 1 大城神社文書 (神崎郡志稿所収)

※ 2 神崎郡志稿所収

※ 3 天保14年より
 杣庄向寄と改
 (小山家文書 No.162)

表—3 は郡別に大工組と組頭の変遷状況を見たものである。郡別大工組の世襲の組頭は、神崎郡組兵左エ門、蒲生郡組高木作右エ門、野洲郡組藤左エ門、栗太郡組三右エ門、甲賀郡組佐治右エ門であった。

この内、神崎郡組兵左エ門については資料を欠いており詳しいことはわからないが、栗太郡組三右エ門は正徳2年(1712)以前に¹⁸⁾、野洲郡組藤左エ門は宝永7年(1710)、甲賀郡組佐治右エ門は享保20年(1735)を最後として退去しているのに対し、蒲生郡組高木作右エ門は文化5年(1808)までは組頭を続けていたことがわかる。

明和2年(1765)の大工組と組頭の状況を組別に見ると表—1, 3 のようになる。つまり、神崎郡組の組頭は佐生村太郎右エ門になっており、組人数は27人と少ないが、内17人は大工役引高をもつ引高持大工であり、組内における特権大工の多さと江戸初期からの大工家の存在を示している。

蒲生郡組は、組頭高木兵庫(作右エ門)の下に324人もの大工が存在していた。これは六箇国大工組の中でも京二十組中の木子組358人に次ぐ多人数大工組であった。蒲生郡は組域内に八幡町や日野町といった当時繁栄を誇った町を抱えており、その商業活動が建築生産需要を生み大工人数の増加に繋がったものと考えられる。

野洲郡組の組頭は吉地村利右エ門で組人数は63人であった。この内25人は引高持大工である。また5人は引高持で大工職を辞めている。

栗太郡組は北組と南組の2組に分立している。北組の組頭は簗村弥治右エ門で72人の組大工がいたが、北組は以後の組頭居住地から見て草津川以北を組域としたのではないかと考えられる。南組の組頭は矢橋村市右エ門で安政2年(1855)に至るまで代々南組の組頭を勤めたようである。明和2年の組大工人数は29人であるが、この内25人が引高持であり、保守的権力の強い大工組であったと考えられる。

甲賀郡組も明和2年には菩提寺組と山南組、柏木組、山北組、杣組の5組に分立している。しかし、組頭は変則的であり、菩提寺組の庄兵衛と残る4組の組頭として市場村五左エ門の計2人しかいない。

甲賀郡の5組の組人数については菩提寺組16人、山南組30人、柏木組・山北組・杣組は3組で87人であり、これらの内、引高持は菩提寺組・山南組あわせて29人となっている。

また、文化5年の五郡大工組の状況については、小山家文書によって知ることができる。つまり

為取替証文之事

一 東近江五郡之儀者先年より郡限ニ細工仕番ニ五郡組頭立会申合候処 年久敷罷成候ニ付五郡之内甲賀栗本神崎三郡者古証文紛失ニ付 此度蒲生野洲二郡之以先例を三郡共相改申

候(以下 略)

文化五戊辰年三月

神崎郡	大工組頭	伊庭村	治郎兵衛	印
蒲生郡	大工組頭	八幡	高木作右エ門	印
野洲郡	大工組頭	木浜	善蔵	印
栗本郡北組	大工組頭	霊仙寺	長左エ門	代庄三郎 印
栗本郡南組	大工組頭	森村	伝右エ門	印
下甲賀郡	大工組頭	菩提寺村	伊兵衛	印
上甲賀郡柏木組	大工年寄	林口村	権兵衛	印
上甲賀郡山北組	大工年寄	新城村	惣次	印
上甲賀郡杣組	大工年寄	深川村	庄兵衛	印
上甲賀郡山南組	大工組頭	池田村	庄次	印

となっている。東近江五郡の大工組は10組となっているが、郡別であることには変わりなく、郡限の細工を申し合わせているものである。図—2 は文化5年頃の五郡大工組の状況を示したものである。

このように東近江五郡の郡別大工組のうち、狭域の2郡つまり野洲郡組と神崎郡組については郡別大工組が存続したが、広域の3郡については、栗太郡組は北組と南組の2組に分立し、甲賀郡組は菩提寺組、山南組、柏木組・山北組・杣組の5組に分立した。蒲生郡組は広域・多人数大工組であったにもかかわらず分立はせず、郡別大工組の形を保ち続けたことがわかる。

次に5組の内、野洲郡組が郡別大工組を保持しえた要因について、甲賀郡組については、その分立の過程について検討することにする。

2) 野洲郡大工組存続の要因

野洲郡大工組は幕末に至るまで郡別大工組の形を保持した数少ない大工組であるが、その要因として組大工中の株大工の存続とその結束力をあげることができる。

特に、明和年中株大工、平大工争論後の『申渡』においては

一、弟子大工共并平大工共之内願絵図裏印持伝江候者ハ格別其外之者共儀ハ 寺社普請受負候儀致間敷候 且又株持大工共之得意先江無断立入細工致候儀不相成罷成致間敷候事

とあるように、伝来の絵図裏印を持たない弟子(弟子筋)大工、平大工などに社寺普請の請負を禁じ、株持大工の得意先へ無断で立ち入ることを禁じている。

また安永6年の『二条東御役所江差上候 大工職方出入目安返答』においては、新規大工に対し「逆意を企私共渡世妨仕候」、「向後親方ニ付添 新規我儘不仕候ハ者随分引立下細工為致可申存念御座候」として、増加する新規大工(弟子大工、平大工)に対して、我儘な働きを咎め、以後親方(株大工と考えられる)に付き細工することとし、新規大工の動きを監視する態勢を作りあげ、株大工の仕事場所を守ることに努めたことが判る。

また、組の崩壊、分立に繋がりやすい世襲の組頭藤左エ門退去後の享保13年(1728)以降においては、組頭の世襲制はとらず、比較的短時間で株大工の間で組頭を交替している。享保13年から慶応3年(1867)の139

図-2 東近江の大工組の支配範囲（文化元～5年）

年間に13人が交替している¹⁹⁾から、平均11年毎に組頭が代わっていることになるが、このような組頭交替制を享保頃から採用している大工組は他には見られない。

また、天保12年（1841）3月の『当組与頭役御願受書写』には「跡役之義一統及評儀罷在候」とあり、次期組頭の選出については組大工一統の評議によったことがわかる。

安政2年には野洲郡組の組人数も122人と増加するものの、このような組運営における保守勢力である株大工の強さと、組頭の交替制と合議制の採用それに組域の狭さ等が、野洲郡の郡別大工組を存続させることに繋がったと考えられる。

3) 甲賀郡組における五組分立の過程

甲賀郡組は元禄5年（1692）当時から郡組内で四つの小組（向寄）に分かれていた²⁰⁾。これは同年の『江州甲賀郡大工組中定帳』に

無役之大工組入度と願申候ハ、四組相談之上ニて古来作法之通ニ組入致入可申候

とあることでも判る。甲賀郡は郡域が広域であったこともあり、組内を4小組に分け、各小組には年寄をおき、この年寄の上に甲賀郡組の組頭佐治右エ門が存在すると言う構成形態をとっていた。

世襲の組頭佐治右エ門は享保19年（1734）7月までは確認できるが、元文2年（1737）には退去しているらしく、組頭の役務であった普請願書への加印も小組年寄に代わっている。さらに元文5年には、甲賀郡組の代表として組頭は欠いており（4小組の）年寄惣代泉村太兵衛がその役を勤めている。

また寛延3年（1750）10月の『乍恐御訴訟』には「当春ヨリ一郡大工仲間ニ新規ニ組を拵 細工場四組に分り候而」とあり、寛延3年春には4人の年寄支配の4小組がそのまま山南組・柏木組・杣組・山北組の4組に分立していたことが窺える。4組の細工場所については、甲賀郡組内小組当時の場所をそのまま引き継いだことが判る²¹⁾。甲賀郡は東部・南部に広大な山間部を抱えており、組大工の仕事場所の不足が甲賀郡組の小組間に争論を起こすことになり、各小組がそれまでの細工場所を守り確立しようとしたことが4組への分立を促すことになった。

しかし、同じ（寛延3年）午ノ10月『乍恐口上書』には「私共よりハ四組之細工場組分奉願候処

六日否之儀可仰付旨御座候処 主水様御死去ニ付延引仕候」とあり、4組の分立は中井役所（主水）には許可されなかったものと推定できる。

明和2年（1765）の甲賀郡は西部に存在していた菩提寺組を加えて5組になるが組頭は2人（菩提寺組が1人と、先の4組の代表として組頭が1人）と言う変則的な状況は、先のように正式な組分けが許可されなかった結果であると考えられる。この甲賀郡組の分立がより完全になるのは、菩提寺組を加えた5組の代表の5人が、その呼称が年寄であっても同列に並ぶ文化5年（1808）11月²²⁾以降になっているからであると言えよう。

小 結

近江国の内、東近江五郡（栗太・甲賀・蒲生・野洲・神崎郡）には郡別大工組が形成されたが、この郡別大工組は中井支配六箇国のなかでも、近江国特に東近江五郡に特徴的にみられるものであることが知られた。これは、中井家が江戸初期の御用作事の際に、地理的にも便利な東近江五郡に存在していた有力大工を大工頭として、各郡内大工を召集したことが郡別大工組の形成に繋がったものと考えられる。

郡別大工組はいずれも郡域を組域とするものであるが、東近江五郡においては、狭域の2郡（野洲・神崎郡）と広域の3郡（栗太・甲賀・蒲生郡）が、それぞれ少人数大工組と多人数大工組として並存していた。しかし、各組の置かれている諸条件の相違により、組運営方式も同一には成りえず、各組はそれぞれに異なった変化の方向を示すことになった。

狭域の野洲郡組と神崎郡組は世襲組頭退去後も郡別大

工組を保ち続けるが野洲郡組では株持大工が権力を保持し、合議制による組頭の交替・選出方式をとったことで郡組の分立を防いでいることがわかった。

広域の栗太郡では、世襲組頭は早期に退去し、その後栗太郡組は2組に分立することになった。

甲賀郡組は、広域に居住する組大工を統括するために、4つの小組に分かれていた。しかし、世襲組頭の早期退去と広大な山間部での建築需要の少なさが、小組間に争論を起こさせることになり、小組は仕事場所の確立を求めて寛延3年(1750)春に組としての分立を願い出るが許可が得られず、郡組内の分立に止まった。甲賀郡組はこの郡組内分立期を経て、文化5年(1808)には正規に5組の向寄大工組へ分立することになったことが判る。

同じく広域の蒲生郡組では、早くから組内に向寄を構成していた。この向寄構成と八幡町や日野町を抱えた蒲生郡の経済的優位性が、郡組内大工に仕事を供給し、広域・多人数にも郡別大工組を存続させることを可能にしたと考えられるが、これについては次稿に譲ることにする。

註

- 1) 拙稿「河内国における大工組の変遷と支配範囲について」日本建築学会論文報告集 318号 昭和57年8月「河内国古橋大工組の構成形態について」同 319号 昭和57年9月
- 2) ①黒正 巖「江州甲賀の大工仲間」経済論叢 25-4 昭和2年
②谷口和子「近世近江国甲賀大工の研究—上甲賀郡杣組を中心として—」滋賀県地方史研究紀要第2号 昭和48年3月
③谷 直樹「江州大工組の変容について—江州甲賀郡大工組を中心に—」日本建築学会近畿支部研究報告集昭和51年6月
- 3) 拙稿「東近江五郡の『郡組』について」日本建築学会大会学術講演梗概集 昭和51年10月
- 4) 表一2に示した通りで、詳しくは拙稿「東近江における郡別大工組について」近畿大学理工学部研究報告第21号 昭和60年9月
他に、野洲郡組旧川端家文書(滋賀県中主町所蔵)があり、福田氏が報告されている
(福田敏朗 谷直樹「江戸時代における野洲郡大工組とその建築活動について」日本建築学会近畿支部研究報告集昭和61年6月)
- 5) 長香寺寄託中井家文書に含まれているもので、昭和58年京都大学川上研究室で調査、整理されている。
- 6) 京大図書館蔵で、これについては拙稿「中井役所支配の大工組について(大工組所在地図を中心にして)」近畿大学理工学部研究報告第8号 昭和48年3月の中で紹介している。
- 7) 『寛永拾三年子ノ十一月 近江国中大工石高之帳』滋賀大学史料館蔵稿本高木家文書
- 8) 拙稿「西近江の郡別大工組について」近畿大学理工学部研究報告第21号 昭和60年9月
- 9) 寛永期の大工頭とその組頭については、谷 直樹「寛永期における中井家配下の大工について—『東林寺奉加帳』を中心に—」日本建築学会近畿支部研究報告集 昭和54年6月
- 10) ①「彦根御役大工之覚」(天保六年六月『御作事方肝煎勤向帳』)「彦根市史中冊」所収 昭和37年9月彦根市役所
②西川幸治「元禄期彦根藩の大工について」日本建築学会近畿支部研究報告集 昭和31年6月
③彦根領は、東・北近江の犬上郡全域と神崎・蒲生・坂田・愛智・浅井・伊香郡にわたって存在した。そのため犬上郡に中井家支配の大工組は存在せず、神崎・蒲生・坂田・愛智・浅井・伊香郡では中井家支配大工と井伊家支配大工が混在していた。
- 11) 寛永13年『江州国中大工石高之帳』により中井配下の大工石高を見ると、愛智郡に大工高はなく、坂田郡は97石2斗1升5合、浅井郡は288石5斗5升、伊香郡は212石9斗8升1合と近江国の他郡に比べ、少なかったことがわかる。
- 12) 文化13年2月『定書』(「近江東浅井郡志」所収)によると、浅井郡には大光寺組・富田組・竹生島御宮大工・高田組・今庄組・高田向寄組の6組大工組がある。
- 13) 谷 直樹「中井家六箇国大工支配の成立・展開過程に関する研究」昭和58年9月
- 14) 註13)によると、近江国大工は、慶長17年の名古屋城作事、同18年の内裏作事、元和4年(1618)の江戸城内御宮作事等の御用作事に駆りだされている。
- 15) 蒲生郡組の高木家文書中の2通の中井信濃守書状は、註13)によると慶長18年の内裏作事と元和4年の江戸城内御宮作事の際の大工召集に関するもので、前者については、「江州きも入衆」に宛て、江州より大工衆200人用意して禁中御普請に出ることを要請し、後者は同じく江州の5人の大工頭(兵太夫は神崎郡、又兵衛・作右衛門は蒲生郡、三郎太夫・伊右衛門は高島郡と推定)に宛て、江州中より「上之大工五拾人」つまり腕の優れた大工50人を江戸城内御宮作事に要請している。
- 16) 註13)によると大和国平群郡法隆寺村は中井正清の出身地であるため、中井家が御用作事に当たった江戸初期において、法隆寺村とその周辺村居住大工を招集したため、法隆寺村の所在する平群郡には、密度高く大工組が分布することになった。
- 17) 村上天文書文化元年『定法書』、蒲生郡組の構成については詳しくは次稿で述べる。
- 18) 正徳2年辰9月の『口上之覚』(「草津市史」所収)には、栗太郡金勝庄井上村大工組頭 小右衛門、同 千右衛門とあり、三右衛門の名はない。
- 19) ①註3)に同じ
②拙稿「江戸時代中・後期における六箇国農村大工組について」(川上 貢編『近世建築の生産組織と技術』昭和59年10月所収)
- 20) 註2)①、③に同じ
- 21) 小山家文書午(寛延3年)ノ十月『乍恐口上書』に、「九ヶ村ハ先年山北組之細工場ニ候所 十ヶ年以来山南組源三郎組下より参候儀ハ」とあり寛延3年以前から組向寄の細工場所はほぼ定まっていたことがわかる。
- 22) 小山家文書文化5辰霜月日『前書』では柏木・杣・山北・山南組の代表は、いずれも年寄呼称に代っている。
(1989年10月2日原稿受理、1990年1月31日採用決定)